

**学校法人永原学園**  
**さんこう**  
**児童クラブ通信**  
令和4年8月発行  
— 第3号 —

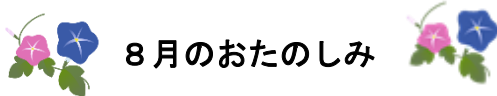
【三光幼稚園】  
TEL：0952-31-0753  
【さんこう児童クラブ携帯】  
TEL：090-7430-1312

暑中お見舞い申し上げます 🌻

猛暑にゲリラ雨、線状降水帯、熱中症警報・・・、ここ最近多く使われる言葉です。どれも、地球の温暖化と関係がありそうな自然現象ですが、私達にとっては、生命の維持に関わる関心ごとです。今年の夏が、無事に過ぎることを祈るばかりです。

さて、さんこう児童クラブにとって、初めての夏休みです。西九州大学のご配慮で多彩な活動が用意されました。宿題をこなしながらも、多様な体験をみんなで楽しみにして過ごしていきたいと思います。体験を通して、ひと回り大きく成長してくれることを願っています。

なお、活動の中には、経費として認められない持ち帰りする材料代がかかることがあります。実費として頂きますことを予めご了承ください。



### 8月のおたのしみ

- 氷ペイント
- 空気砲製作
- 映画鑑賞
- ボンデアート
- 調理体験（おにぎらず作り）等

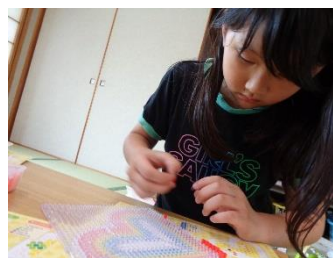
### 8月の学童児童数

	7月末 在籍数	8月 新規人数	8月初日 人数
1年生	12	0	12
2年生	2	0	2
3年生	0	0	0
計	14	0	14

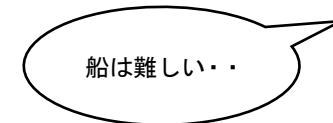
### 児童の様子

梅雨が明けると猛暑到来！色々なお楽しみ行事と一緒に本格的な夏がやってきました。子どもたちは元気いっぱい、宿題に取り組んだり、色々な遊びを楽しんだりしながら仲を深めています。

最近子どもたちが楽しんでいるのはアイロンビーズです！最初は何人か取り組んでいましたが、ある時、「もっと色々な形のアイロンビーズを作りたい！」という子どもの思いを聞きました。そこで、ビーズの量を増やし、パフェやいるか、車、船などのお手本シートを用意してみました。すると、興味を持つ子が増え、お手本シートを参考に色々な作品を作って楽しむ子どもたちの姿が見られるようになりました♪「車を作って弟にあげよう♪」「私はお母さんにあげる！」と自分だけではなく、家族へプレゼントするために作る子も(^\_^)家族への愛が感じられ、温かい気持ちになりました♪



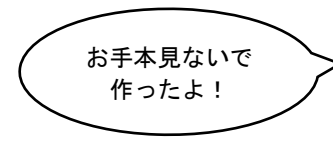
外側は赤にして  
内側は黄色にしよう！



船は難しい・・・



完成！！



お手本見ないで  
作ったよ！



### ◎8月の目標◎「夏休みの宿題を頑張る」

少しずつ難しくなっていく宿題に苦戦している子どもたち。宿題のプリントとにらめっこをしながら一生懸命取り組んでいる姿が見られます。中には「家に帰ってからする～！」と、諦めそうになる子も出てきました。すると、「宿題を後回しにしたら後で大変だよ。」「夏休みの宿題は20個もあるんだよ！毎日少しずつしていけないと！一緒に頑張ろうよ！」と友達が応援してくれていました♪初めての夏休みの宿題、友達と一緒に頑張ってくれるといいなと思います(^\_^)

## 「子どもの造形へのまなざし」

西九州大学 子ども学部子ども学科  
准教授 新井馨

子どもは、何かを作ったり、絵を描いたりすることが大好きです。人はこういった造形活動を通して、つくる喜びを味わい基礎的な諸能力を育てています。造形活動とは、何もないところから形を生み出し、それを通じて他者に伝える活動、つまり「表現する」「創造する」ということでもあります。さて、子どもはどんな気持ちでそのような一連の行為、「表現」や「創造」にいたるのでしょうか。また、子どもが嬉しそうに見せてくれる、作ったもの・描いたものへ私たち大人はどのようなまなざしを持って対応すればよいのでしょうか。

例えば、子どもの描いた絵に対して「上手に描けたねー。」とよく大人は言います。この言葉が悪いわけではありませんが、上手があるということは下手があるということです。目の前にある子どもの表現・創造を見ているのではなく、上手な作品・下手な作品といった概念を見ているということです。どういうことかということ、子どもの作品は、みずみずしい感性にあふれています。その子が何に驚き、何に目を見張り、何に心動いたのかが画面の中いっばいに表現されています。それを「上手に描けたね」の言葉ではなく、その子の見たこと、感じたことを見るということです。大切なことは、その子どものつぶやきに耳を澄ます、ということです。

そうは言っても、、、と思われるかもしれません。ここで、思い出してほしいのですが、これを読んでいらっしゃるあなたも、私も、かつては子どもでした。しかし、私たち大人は成長とともに子どものころの豊かな感性をどこかに置き忘れてきたように感じませんか。小さなころには平気に触っていたカエル、手づかみで捕まえた蝶々やカナブンも大人になるとすっかり触ることができなくなっていないですか。梅雨明けの青空の高さや、冬の寒空の下吐く息の白さにワクワクした気持ちはどこにいったのでしょうか。子どもは、私たち大人がなくしてしまったかもしれないこういった感性をもって日々生きているのです。「上手だね」とほめる言葉だけではなく、毎日の発見や喜び、ワクワクが、いっばいつまった画面の背景を探ってみてください。わからなければ子どもに聞いてみましょう。きっと、どうして描いたのか、何を考えたのかたくさん教えてくれることでしょう。そのお話からは、きっと素敵な子どもの世界を知ることができるはずです。そして、これらのコミュニケーションから、子どもは表現する喜びを周囲のあたたかな関わりから獲得し、また成長してゆくのです。